

〈論文〉

学校のために、祖国のために

——プロテスタント教育家アンドレス・オスーナと
メキシコ革命——

大久保教宏

I メキシコ史とプロテスタント史の出会い

筆者の問題関心はメキシコ革命におけるプロテスタンティズムの動向を探ることであるが、このテーマについてはすでにバステイアンとボールドウィンという二人の先学がほぼ同時期に研究書を上梓している¹⁾。いずれも一次資料を豊富に駆使し、プロテスタンティズムがなぜメキシコ革命に積極的に参加していったかを詳細に解明しているが、それ以上に、メキシコの歴史記述の中に初めて明確にプロテスタンティズムを登場させたという点で、これらは画期的な意義を持つ研究であった。

とはいえ、それまでメキシコのプロテスタンティズムに関する研究書が全くなかったかと言えばそうではなく、むしろ意外なほど多数ある。それらをバステイアンが分類しているのだからそれに従って見ていくと、まず「メキシコのプロテスタンティズムは米国による帝国主義的進出の担い手であり、資本主義の膨張をイデオロギー的に正当化する宗教としての作用をもつ」と捉える「カトリック聖職者によって公にされた反プロテスタント的著作」や、「外来の宗教が入ることを国民形成に反する価値の浸透、文化的逸脱として強調する反米的著作」があり、次に「護教を目的とし、教会や宣教の発展の経過を扱い」、「宗教的イデオロギーを政治的、社会的、経済的要因と結びつけない」²⁾研究を挙げている。メキシコにおけるプロテ

スタンティズム研究の主流を占めてきたこれらの研究は、プロテスタンティズムとは何かを問う本質論や、教勢の拡大を記述する教団史であり、糾弾や護教という教派的関心を明確に帯びている。

これに対し、「メキシコ社会におけるプロテスタンティズムの存在についてその文脈を見、批判的な解釈を加えようとした唯一の研究」³⁾として、バステイアンはポールドウィン⁴⁾の博士論文⁴⁾を挙げている。当然バステイアンはポールドウィンの研究が持つ批判性や文脈重視の態度を評価している。そして、バステイアン自身の視点については、「私はセクトという社会学的概念においてプロテスタント集団を捉えようとはしない。それはその概念が否定的意味を持つからというよりは、プロテスタント集団がむしろリベラル派の歴史や文化に開かれていたからだ」⁵⁾としている。

バステイアンはここで「セクト」という言葉を用いているが、この言葉に付された社会学的意味の全てにおいてこの語がメキシコのプロテスタンティズムをうまく説明しえないと言っているのではなく、糾弾や護教を目的とした研究がプロテスタンティズムをメキシコという具体的な地域の歴史から切り離し、いわば閉じられた宗教集団として捉えてきたことをこの語によって端的に示したかったからに違いない。だが、このような意味での「セクト」視は何もこれらの研究だけに限られた問題ではなく、メキシコの歴史記述全体に見られる傾向でもあるということがむしろ指摘されねばならないだろう。キリスト教会内、あるいはそれが支配的な社会において、他の小宗教集団を異質なものとし、歴史におけるその存在の正当性を否定する語として、元来「セクト」という言葉は用いられていた。客観的、価値中立的であるべき学問の場にも「国民性」が出るものだが、プロテスタンティズムや他の宗教を蔑視する態度がないにしても、少なくともこれらを「マイノリティ」、「外来」、「後発」⁶⁾ということによって重要視しない、分析対象として積極的に取り上げないメキシコでのメキシコ史研究は、カトリック教会が支配的な影響力を行使してきたメキシコの「国民性」を反映していると感じられる。バステイアンもポールドウィンも（僭越ながら筆

者も)メキシコ人ではないことは単なる偶然ではないだろう。バスティアンは強調している。「19世紀末にメキシコ人口の1~2パーセントを獲得したにすぎない外国起源の分離派宗教がなしたことへの関心は、メキシコの歴史記述にとっては些末なこと、あまり重要性のないこととして捉えられるであろう。だが、周縁的な現象の研究も、この時代のメキシコ社会に影響を及ぼした変化、危機といった全体的な流れに関わることなのである」。「メキシコにおけるプロテスタントイズムという新しい宗教形態の研究は、メキシコの歴史記述における周縁的テーマなどではなく、同様に教団史、あるいは奇異で神秘的な分離派の歴史に還元できることでもない」⁷⁾。

典型的な例として、革命初期の軍略家パスクアル・オロスコがプロテスタント信者であったことに、彼の伝記や研究書が触れていないことが挙げられる⁸⁾。マデーロが発した革命への呼びかけに応じてチワワで逸早く蜂起し、ディアス政権(1876—1911年)の崩壊を決定づける重要な戦闘において勝利を取った革命の英雄として、あるいは後に反革命へと走った裏切り者としてメキシコ史に登場するオロスコ像において、「セクト」の信者であったか否かは語るに足ることではなかったのである。

これに対し、バスティアンもボールドウィンも、プロテスタント信者が革命へと走った理由の少なくとも一部は、彼らがプロテスタントであったがゆえのこととしている。ボールドウィンは「1910年に革命が勃発した際、この反乱をどのように捉えるかの意見形成を、プロテスタントたちはプロテスタントイズムの制度や、彼らが一体化していたプロテスタントイズムの文化に依拠して行った。このようにして形成された意見が彼らの行為を導いた」とし、「最も傑出したプロテスタント反乱者の一人」⁹⁾としてオロスコを捉えている。また、オロスコ以外にも著名な革命家の中にプロテスタント信者がいたことがバスティアンやボールドウィンの研究を通して改めて確認されただけでなく、プロテスタント信者としての出自が彼らに革命参加を促したこと、彼らは必ずしも「セクト」という閉じられた集団の

成員ではなく、メキシコ全体の動静に敏感に反応し、積極的に外部に働きかけを行っていたことが明らかにされた。ここに、それまで互いに接点なく記述され続けてきたメキシコ史とプロテスタント史とが初めて出会いを果たしたと言える。この意味で、バステイアン、ボールドウインの研究は画期的であったのだ。

II オスーナ研究の視座と方法

しかし、このテーマの研究は始まったばかりであり、バステイアン、ボールドウインが扱わなかった研究対象、視点、資料、方法がまだ多く残されている。第一に、バステイアンは革命勃発以前、ボールドウインは革命の動乱期を取り上げたが、続く革命の建設期がいまだ分析対象とされていない点が挙げられる。一般に動乱期と建設期は革命憲法が発布された1917年を境とするが、憲法を発布したカランサ政権（1914—20年）以後、オブレゴン政権（1920—24年）、カイェス政権（1924—28年）において、閣僚、国会議員、州知事、公立学校長、州政府教育行政官など、中央、地方の革命政府の中核、特に国民国家建設のイデオロギー発信地である教育行政にプロテスタントの姿が顕著となっている。旧体制の破壊だけでなく、新体制の建設にもプロテスタントがより公式な形で加わっていた。このように、建設期には革命とプロテスタンティズムをさらに密接に結び付ける新たな局面が見られるのである。

第二に、建設期に多くのプロテスタントが政府の要職に就いたことは、革命の側からもプロテスタントに対して何らかの働きかけがあったことを示唆している。ある種の革新主義の傾向を持つ北部出身の有力革命家たちは、米国の「先進文化」に対して受容的であった。「民主主義」、「自由と平等」、「先進的教育」、「近代的科学」、「禁酒」など、彼らが良いと考えるものの範が米国にあると見なされた。米国との地理的近接のゆえ、彼らの周囲にはプロテスタント信者が比較的多く、個人的知己もいたわけだが、近代的国民国家を形成する際に有用とされた米国の「先進文化」の導入に、

プロテスタントが仲介者として役立ったのである。プロテスタントの側も革命家からの要請に応えるべく、米国文化の伝達者としての役割を自任し、また、国民国家建設という革命の目標に賛同できるようナショナリズムへの傾斜を急いだ。革命とプロテスタンティズムとの関係は決して一方通行ではなく、相互作用関係であったのだ。

第三に、バスティアン、ボールドウィン は政治的、経済的、社会的要因を重視したが、プロテスタンティズムが革命に対して態度を決定する際の神学的、宗教思想的な動機に関しては、やや分析が皮相的である。その原因は、プロテスタントが自らの思想を書き残した文献を資料としてあまり活用していないからである。それらの文献を積極的に分析の俎上に載せ、彼らの思想内容に踏み込んだ研究も必要と思われる。

そして、このような思想研究は何人か特定のプロテスタント信者を取り上げて行われようが、そのことはバスティアン、ボールドウィンの研究においてはメキシコ・プロテスタンティズム全体の中に括られていた個々のプロテスタント信者の姿を、より鮮明に浮き上がらせることになるろう。プロテスタント個人史への注目、これが第四の点である。

以上の点を念頭に置きながら、筆者はすでに二点の論考を発表した。まず、カイェス政権で公教育省次官（一時大臣）となったプレスビテリアン信者モイセス・サエンスを取り上げ、彼が推進した国民形成のための教育改革を、メキシコのプロテスタントたちの宿願であった市民宗教の創造と重なるものと位置づけながら、革命の教育行政とプロテスタンティズムとの思想的関連を明らかにした¹⁰⁾。次いで、革命政府から官製ナショナリズム形成の要諦とも言える教育に活動の場を与えられたプロテスタントたちが、普遍主義宗教の徒であるがゆえに神学的葛藤に陥りながらも、宗教思想上の変遷を遂げ、自らもナショナリズムを語り出す経緯を、まさにこの時代、1919年から29年まで出された超教派雑誌『キリスト教世界』*El Mundo Cristiano*の記事をもとに検証した¹¹⁾。以上の作業において判明した点の一つは、プロテスタンティズムがメキシコで影響力ある宗教と

しての地位を得、教えを広めるために、革命という状況を利用して積極的に戦略を練っていたことである。それを概略化して言えば、教育をはじめとする米国の「先進文化」に精通し、ナショナリズムを標榜しながら、革命政府との関係を密にし、その政策の中にプロテスタント主義の要望や技術を反映させる、というものであった。

本論で取り上げるメソジスト信者アンドレス・オスーナ Andrés Osuna (1872—1957年) は、カランサ政権で連邦区公教育局長、タマウリパス州暫定知事を歴任するなど、プロテスタントとして革命政府の要職に就いた先駆者である。政府にあってはサエンスを公教育省へと招いてプロテスタント主義の影響力を強化しようと努め、プロテスタント教会内では教会の一致・現地化を先導しながらナショナリズムの高揚に尽力するなど、プロテスタント主義の革命参加を早い段階から画策した、いわば戦略の中心人物の一人であったと筆者は目している。

オスーナの名は革命史や教育史研究に散見する程度で¹²⁾、彼を中心的に扱った先行研究はなく、彼が創設に関わったサルティーヨ師範学校創立75周年記念に出された簡単な伝記¹³⁾が一点あるだけである。彼が属した北メソジスト監督教会の週報『キリスト教弁護士』*El Abogado Cristiano* (1877—1919年)、前述の『キリスト教世界』といった教会関係の雑誌、及び『教育報』*Boletín de Educación* (1916年)、『公教育省報』*Boletín de la Secretaría de Educación Pública* (1922—34年)などの公教育省の定期刊行物には、彼の消息を伝える記事の他、彼自身の筆による記事もいくつか目にする事ができる。また、著書も数点あるが、中でも彼が残した自伝は、メキシコのプロテスタント研究における貴重な資料と言える。加えてその表題『学校のために、祖国のために』*Por la escuela y por la patria* は、オスーナが、そしてこの時代のプロテスタントたちが何をしようとしていたかを象徴的に表している。

以上の資料から、本論はオスーナの生涯を追いつつ、混乱の革命を生き抜いた一プロテスタントの姿を描き出す。だが、単なる伝記の焼き直しが目的

ではない。オスーナを政府高官に任用するほどに、メキシコ革命が国民国家建設における重要な役割（教育体制の整備、米国文化の導入など）をプロテスタンティズムに託そうとしていたことを確認することで、従来語られてこなかった両者の関係を明らかにできよう。さらに、その役割を果たすための政府高官としてのオスーナの活動が、プロテスタンティズムの影響力拡大という信仰に依拠した目的と決して無関係のものではなかった点を見極めつつ、革命に追随しながらこれを利用しようとするプロテスタンティズムの戦略性を解明することが本論の目的である。

Ⅲ プロテスタント教育家オスーナの誕生

革命政府高官に就任する以前のオスーナは、専らメキシコ北部から米国を活動領域とした。生まれはタマウリパス州の植民村であった。自伝によれば、両親はまだ10歳のオスーナに英語を学ばせるため、国境の町ヌエボラレードの友人のもとに彼を預けたが、この友人はオスーナを米国側ラレードのメソジスト牧師のもとに送っている。その後、家族の友人が得た奨学金でヌエボレオン州モンテレイのメソジスト系高等学校に通い、同地の師範学校を卒業した¹⁴⁾。自伝からはオスーナがいかにしてプロテスタンティズムに入信したか定かではないが、オスーナ家を囲むメソジスト信者網の中にいたことが、彼を信仰に向かわせたのであろう。ちなみに弟のグレゴリオもメソジスト信者で、カランサに従って将官となり、兄同様タマウリパス州暫定知事となっている。米墨国境地帯というアングロ、ラテン両文明の「境界領域」に生まれ育ち、両国を自由に往来したことが、メキシコ人でありながらプロテスタント信者であり、米国文化に通じたオスーナという人物を作り出した。

師範学校を卒業し、ヌエボレオン州公認の学位を得、コアウイラの州都サルティーヨへ移り、自ら学校を開いた1892年は、オスーナにとって転機の年であったと言える。「私はコアウイラ州では教育学を修めた最初の教師であったので、私の学校にはサルティーヨの名家の子弟が集まった」¹⁵⁾

という自伝の記述は、「辺境」の北部社会においてははまだ教育体制が整っておらず、プロテスタントによる小規模の教育事業が効力を発揮する余地も充分にあったことを物語っている¹⁶⁾。

さらにこのことは、オスーナが政治に関わるきっかけとなった。コアウイラ州で起きた政変の調停のため、ヌエボレオン州知事ベルナルド・レイェスがサルティーヨに来訪したが、彼が投宿した場所が丁度オスーナの学校の前だった。早速オスーナはレイェスを訪問し、暫定知事ホセ・マリア・ムスキス以下、州政府高官と知己の仲となり、以後オスーナはコアウイラ州有数の教育専門家として、州政府において名の通った存在となった。1894年、州政府はサルティーヨに師範学校を開設するが、オスーナをその教師として招いた。さらに州政府が米国ボストン近郊の師範学校に留学生の一行を送ることを決定すると、オスーナを団長に任じている。オスーナは自らにこの使命が託されたことを「教育事業に専心してきたことと英語への堪能」¹⁷⁾のゆえとしているが、以後、教育学や英語能力に代表される米国文化への通暁が、オスーナの生涯において大きな意味を持つのである¹⁸⁾。

帰国したオスーナは教育者としての能力を認められ、州政府からサルティーヨ師範学校の校長に任じられた。オスーナが得た最初の官職である。そこでオスーナが推進したことは、米国の教育学に依拠した教育の「専門化」、「科学化」であった。「この学校での実践と米国での観察から得られた私の最も強い確信は、教育が厳密にその本来の役割を果たすために、教師が教育にだけ従事する必要があることである」¹⁹⁾。彼は師範学校で教育学、教育心理学を教え、また、体育教育の導入、夜間授業の開設など、積極的に新しい試みをした。「政府から認可を受けて、我々は州都の全ての教師のために夜間授業を開き、教育学、言語教育法、数学教育法など特別な科目を教えた。[…] 留学して学んできた我々教師陣は、米国で得た最良のものを彼らに与えるべく尽力した。まず最初に […] 近代教育の概念を多少修正しなければならないことを彼らにわからせることから始めた。

すなわち、子供たちにより積極的な役割を付し、子供たち自身の活動を刺激し、忍耐をもってそれを巧みに導くことである。ベラクルスの教師によって広められた教育方法は、教師が教えようとする内容についての実践を生徒にまず見せ、それを生徒が後で反復するというものであった²⁰⁾。

「ベラクルス」とは当時メキシコで最も優れているとされたハラーバ師範学校を指しているが、オスーナは米国式のプラグマティズム教育学を掲げてそれに対抗しようとしている。

だが、オスーナにとって「科学的」教育学の普及は、プロテスタント教会内においてもなされるべきことであった。彼が『キリスト教弁護士』に初めて掲載した記事は1903年の「授業の準備」であったが、そこではプラグマティズム教育学の重要性を説き²¹⁾、さらに1910年の「日曜学校のための段階別授業」では「近代の心理学の原理に厳密に従った授業をメキシコの全日曜学校に導入するべき²²⁾」と唱えている。以後、オスーナは教育関連の記事を教会系の雑誌に盛んに書き、プロテスタンティズムを「科学的教育の専門家集団」に作り変えようとしている。

IV 革命に身を投じる

1899年、コアウイラ州知事ミゲル・カルデナスはオスーナの提案により初等教育局の設置を決定し、その局長にオスーナを任じた。ディアスの対抗勢力であるレイェス派に近かったカルデナスは1908年に州政府を追われたが、これがオスーナが反ディアス闘争に入るきっかけとなったようだ²³⁾。

「公教育に重要な役職を占めてからというもの、政治における地位は一切受けず、いかなる選挙活動においても積極的な役割を果たさないことを心に決めた。カルデナス知事がこのような我々の意見を尊重してくれたことは幸せであった²⁴⁾。だが、この決心に背くように、その後のオスーナは政治へと深く関わっていく。上記の引用の直後に、コアウイラ州における民主党結成に彼が加わったこと、「さらに後、私の知人、個人的友人であるフランシスコ・マデーロ氏に率いられた運動が始まり、彼が政党を結成

するためにサルティーヨを訪れた時、私もいくつかの集会に招かれ、プログラムに参加した²⁵⁾ことが記されている。

さらに自伝はカルデナスの後継として暫定州知事となったカランサとの親交へと話を進めていく。カランサは「毎日公教育のいずれかの部局を予告もなしに訪ねた。[...] 私は彼と意気投合し、重要な問題についてはまず州知事に前もって相談する私の仕事の進め方を彼も理解した²⁶⁾。

自伝にはオスーナのカランサへの信頼を示す挿話がある。サルティーヨに大きな学校を持つイエズス会が中心となり、オスーナを解任させようと署名を集め、カランサに提出したが、カランサは役人としてのオスーナの功を認め、解任する理由はないと突っ撥ねた。「私はカランサ氏の個人的友であり続けた。彼はコアウイラ州の教育改革を始めた一人であり、サルティーヨに来るたびに師範学校を訪れ、わざわざ私にも会いに来てくれたものだ²⁷⁾。次期州知事選挙におけるカランサの存在を危険視したディアス政府は新知事を任命した。この政争でカランサの側に付いたオスーナはこの機に辞表を提出する。以後、オスーナとカランサの親しい関係は1920年のカランサの死まで続いた。メキシコ北部における革命運動でのプロテスタントと革命家とのこのような個人的関係が、後に革命政府でプロテスタントが要職に就く一因となったことは、モイセスの弟アーロン・サエンスとオブレゴンとの関係においても見出せる²⁸⁾。

1909年、オスーナはメキシコを去り、米国テネシー州ナッシュヴィルのメソジスト出版社でスペイン語翻訳の仕事を得、南メソジストのヴァンダービルト大学で教育学を学んだ。この「亡命」が可能であったのはメソジスト教会のおかげであり、そのためかオスーナの教会活動も活発化したようで、ナッシュヴィルのメソジスト年会にも出席し、講演を行っている。マデーロやカランサとも頻繁に連絡を取っており、米国政府がウエルタ反革命政権(1913—14年)を承認しないようワシントンでロビー活動を展開し、カランサ政権の成立を助けている。

家庭的には妻子を病気で次々と失った時期であり、伝記には「妻の死を

きっかけに翻訳に没頭した²⁹⁾とある。しかし、没頭したのは翻訳だけでなく、1910年には『教育心理学入門』³⁰⁾をナッシュヴィルで出版している。前述のように、オスーナが従来からのメキシコの教育に対して批判的であったことは随所で読み取れる。たとえば、「私がサルティーヨで教育局長をしていたとき、ハラーパ師範学校長エンリケ・レブサメン先生によって書かれた初級講読本が出版されたとの報を受けた。これは一年生の子供たちの教育に用いようと我々が待望していたものであったが、査読してみたて幾分失望したことを正直に言わなければならない。なぜなら、心理学の原理に依拠していないからだ³¹⁾。そのため、オスーナは独自に初級、中級の講読用教科書を作っただけでなく、心理学に依拠した教育学を教師が学べるように、『教育心理学入門』を著したのである。恐らくこれは教育心理学の書としてはもちろん、メキシコ心理学の先駆者とされるエセキエル・チャベスが米国の心理学者ティチナーの『心理学入門』³²⁾を訳出したのが1904年のことだというから、単に心理学の書としてもメキシコで初期のものに属する。メキシコで知られるようになったばかりの心理学を用いながら、オスーナはハラーパ師範学校に代表されるメキシコの実証主義教育を古いものとして葬り去り、米国で学んだ自らの教育学を最新の教育学として打ち立てようとした。

また、オスーナはナッシュヴィルにあった米国南部心理学会にカランサ政府の代表として出席しているが、オスーナはこの学会の様子やヴァンダービルト大学での学業の修了などを逐一カランサに報告した。この知らせを受けて、カランサはオスーナを連邦区公教育局長に任じたのである³³⁾。1916年の『教育報』にはオスーナの就任を伝える記事が掲載され、彼の略歴が記されているが、革命でカランサ側についたことその他、コアウイラ州での教育活動、米国への留学、『教育心理学入門』という「称賛すべき」業績、『倫理学入門』（注29参照）の翻訳など、当時のメキシコにおいて新しい教育を彼が培ってきたことが、彼の選任の根拠として述べられている³⁴⁾。つまり、プロテスタントであっても、革命に賛同し、教育に秀でる

ことで革命政府の高官になれることを、彼は身をもって示したのである。まさに、「学校のために、祖国のために」働くことが、彼の出世を可能にした。そしてさらに、1918年にはカランサの要望で、政変のあったタマウリパス州の暫定知事にも就任するのであった。

連邦区公教育局長、次いでタマウリパス州暫定知事となって以後のオスーナは、これらの肩書きにより、プロテスタント教会内で傑出した人物となったはずである。1916年にメキシコ市のメソジスト会堂で行った講演には、聴衆が500人を下らなかったと言う。そのテーマは「なぜメキシコ人は民主的に自らを治めるに至っていないか」であった。『キリスト教弁護士』にその要約が掲載されている。それによれば、「不幸なことにメキシコの独立は愛国心の結実ではなく、カトリック教会とアグスティン・デ・イトゥルビデの間で画策された背信による。[...] 教会が愛国者であったことは一度もなく、自分の利益しか考えてこなかった。[...] 独立後も教会は国民生活において無制限の影響力を維持し続け、メキシコ政治に介入し、支配しようとした。なぜ独立後一世紀を経たメキシコ人が民主主義的国民としての基盤を築くことなくこうも争いを繰り返してきたか不可解に思う者もあろう。そのことに首を傾げるのは、祖国メキシコを巻き込んできた戦争の全てが、自由を求める者とそれを阻もうとする邪悪な教会の間で行われてきたことに気付いていないからだ。現在の革命は人々がその破滅的な影響力から解放されようとする最後の努力に他ならない」³⁵⁾。このようなカトリック教会非難は、メキシコ各地で革命派がカトリック教会を略奪し、1917年憲法制定に向けてカトリック教会の諸特権を剥奪しようとして論議されていた当時としては、決して珍しいことではない。しかし、カトリック教会をいわば国賊視する激しい非難を通してオスーナがプロテスタントたちに語ろうとしたことは、プロテスタンティズムがカトリシズムに代わるメキシコの愛国的宗教となり、ともに新生国民国家建設に加わろうというナショナリズムであった。それまで圧倒的なカトリック教会の力や打ち続く戦乱を前にして、プロテスタントたちの意気は消沈しがちで

あったが、今こそ教育や民主主義という米国文化やプロテスタンティズムの価値を掲げて革命に参加するべきだとする、実際に革命政府の要職に就いたオスーナの言葉は、他の誰の言葉よりも説得力があったに違いない。

政府高官のオスーナがプロテスタントであったことは、プロテスタンティズムの影響力拡大を喜ばない者の反感を買い、特に公教育大臣フェリクス・パラビシーニはオスーナを警戒した。パラビシーニは立憲議会において徹底した反カトリック条項の制定に異を唱えた親カトリック派議員の一人であった。このような人物を公教育大臣に据えながら、それに次ぐ地位にプロテスタントを任命したことは、宗教問題に関するカランサの曖昧な態度を如実に示している。パラビシーニ自身は「プロテスタントであったとは知らずに」³⁶⁾オスーナを公教育省に迎え入れている。パラビシーニは公教育省を辞した後、『エル・ユニベルサル』*El Universal* 紙を創刊したが、その社説がオスーナを名指しで非難している。「アンドレス・オスーナ氏は […] 公教育をいわば「プロテスタント化」することを目的としていた。生徒たちの意識の中でカトリシズムを打ちのめし、密かにそれをプロテスタンティズムに取り替えようとしていた。 […] プロテスタンティズムは公定世俗主義の覆いの下に忍び込み、 […] 急進派の目をごまかしてきた。 […] 「我々をプロテスタント化する」あらゆる努力は、我々を害する他国からの精神的征服の明らかに一部である」³⁷⁾。

これらの誹謗の言葉はあながち根拠のないことではない。プロテスタントが「密かに」「忍び込んできた」のは、当時はまだプロテスタンティズムに対する偏見が強く、教育や民主主義については公然と語りながらも、信仰については「密かに」ならざるをえなかったからだ。また、「公教育のプロテスタント化」については、「教育は世俗的であるべき」³⁸⁾と述べていることから、オスーナが「公教育＝プロテスタント教育」の実現を考えていたとは思えないが、プロテスタント信者を積極的に登用し、公教育省内でプロテスタンティズムの影響力拡大を狙っていたことは窺える。新憲法発布後、一時公教育省は廃止され、全学校の管轄権は公教育局長たるオ

スーナの下に移ったが、このときモイセス・サエンスを国立予科高等学校長として初めて公教育省に任官させている。後にサエンスの次官就任で頂点に達する公教育でのプロテスタント隆盛の時代は、こうしたオスーナの戦略を契機としている。さらに、プロテスタンティズムが米国の「精神的征服の一部」であるというのは、当然プロテスタンティズムが米国起源であることを突いており、反米意識の高いメキシコにおいては有効な攻撃の言葉であった。しかし、オスーナのこれまでの論にも見られるように、この時代のプロテスタンティズムはむしろ米国文化を称揚し、それへの精通を強調している。米国の政治的拡大は喜ばないが、その文化には利用すべき点があるとする革新主義的な有力革命家の登場により、米国文化への精通はプロテスタンティズムにとって推進すべき戦略と化したのだ。もちろん、すでに米国の歴史においてプロテスタンティズムは米国文化と一体化し、民主主義、教育重視、進歩思想などは、神の国建設という米国プロテスタンティズムの宗教的理想と重なるものとなっていた。だが、メキシコにおいてはそれらはあくまでも世俗的文化要素として評価されるものであった。そのため、プロテスタンティズムもそれらをひとまず宗教と切り離し、世俗的なものとして掲げてメキシコ人を安心させ、それらの伝達者と称して革命家に接近し、それらを広めることによって、実はそれらと一体化しているプロテスタンティズムの宗教的理想を実現しようとしたのだ。

しかし、間もなくオスーナは「州や首都で権勢を振るう政治家たちの態度に深く失望して」³⁹⁾、1919年に州知事を辞し、その後は比較的自由な立場となり、教会活動へと専心していく。

V プロテスタント・ナショナリズムの指導者として

連邦区公教育局長、州知事への就任はプロテスタントとしては異例の栄進であったが、それはかえってオスーナに、いまだプロテスタンティズムに対する偏見がメキシコ社会に根強いことを思い知らせた。このような状況にあってプロテスタンティズムが影響力を伸ばしていくには、その信仰

世界よりもまず世俗的な能力を社会に認めてもらうことが重要であった。オスーナの出世の要因は革命家との親交と教育能力が認められてのことだったので、同様に革命への同調、教育能力の向上へとプロテスタンティズム全体を向けることがプロテスタンティズムの地位の上昇に結びつくと、一層強く考えるようになったに違いない。

タマウリパスからメキシコ市に戻ったオスーナは、教会内で多岐にわたる活動を開始している。1921年以降、メソジスト年会の議事録にオスーナの名が見えるようになるが、その肩書きは「信徒会代表」及び「合同出版社社主」である⁴⁰⁾。このうち、特に後者は重要な意味を持つ役職であった。合同出版社はラテンアメリカのプロテスタント諸派の協力を目指してメキシコとアルゼンチンに設立された二つの超教派出版社のうちの一つで、プロテスタント・ナショナリズムのプロパガンダ雑誌『キリスト教世界』の出版元でもあった。つまり、ラテンアメリカの教会統合、メキシコのプロテスタント・ナショナリズム高揚の要となる職にオスーナは就任したのである。

オスーナは『キリスト教世界』に必ずしも多くの記事を書いてはいないが、教育やナショナリズムに関して重要な論を展開している。この雑誌における彼の最初の記事「教師」では次のように述べている。「それぞれの子供の将来は教師の手に委ねられている。[...] この影響力が社会の全ての子供に行き渡るとすれば、教師の教育作業は社会の未来を意味すると言うことができる。教師が学校で形成を助ける習慣は [...] 社会全体の特性を決定付けるに至るであろう。子供の肉体的健康が守られ、改善されることに注意が払われ、身体の成長がより強く、極限に至るまで求められるなら、健全で強い個々人によって形成される社会も健全となり、活力に溢れ、進歩を目指すものとなろう。よって、精神の養成者、子供の導き手に祖国の未来が委ねられていると、確信を持って言われてきたのである」⁴¹⁾。このように、教育とは健全な祖国の形成のために必要であるという、革命政府の方針と合致したナショナリズム教育論を展開している。続く記事「教

育の業」では、その教育においてプロテスタント教会が重要な役割を担っていると言く。「プロテスタント教会が掲げる主要なプログラムの一つに、民衆に教育を広めることがある。その起源となった宗教改革も、公共の学校に尋常ならぬ推進力を与えた社会運動であった。ヨーロッパの歴史を見れば、人間的知識の基本を体系的かつ適切に教育することを通して、社会の底辺の人々を呼び覚まし、社会の集合体に組み込もうとしたこの比類なき改革が、その最も輝かしい一頁となっていることがわかる。[...] 大國アメリカ合衆国の驚異的な発展と測り知れない力は、大部分これらの教育システムに負っている。先の世界大戦によって大災難を被ったにもかかわらず、世界中には我々が形成する人間社会の一側面を完全に変えたこの偉大な改革の重要な諸要素が広まっている。と言うわけで、プロテスタント教会が各地に学校を建て、教育運動が可能な形で実現されるように促進しながら、その文化の伝統を維持していることは理のあることであった。メキシコとしてその例外ではなく、この地にプロテスタントの活動が開始されて以来今日に至るまで、メキシコの各地に学校が建てられていった。[...] プロテスタント学校は常に様々な教育施設において、真の教育作業を推進している」⁴²⁾。この雑誌の読者が大部分プロテスタント信者であったことを考えると、祖国のために教育をなそうということを、オスーナはプロテスタント信者に対して説いていることがわかる。

しかし、単に祖国のためにと表面的に唱えるだけでなく、より根本的な問題、すなわち、この目的に合致するようにプロテスタンティズムという宗教の性質をもある程度変える必要があるとオスーナは考えていた。

「我々が述べたいのは、個々人の必要や各人に課せられた社会的義務を疎かにしないことで初めて他人のために真に役立つよう生き、働くことができるということだけである。[...] この偉大な道徳的原理に教師以上に従うべき者はいない。教師は日々の作業において、全ての目的において、彼がなす全てのことにおいて、生徒、そして社会全体に誠実かつ忠実に仕えなければならない。この仕える精神を決して失ってはならないのである」。

来世における個人的救済を強調するプロテスタンティズムは、ともすると現実社会の問題から目を背けることがあった。だが、革命に参加し、カトリック教会を抑えて影響力ある宗教としての地位を獲得するには、メキシコ社会が抱える問題に目を向けていかなければならない。そこで、オスーナは教育問題に仮託して、「社会的義務」や「道徳」を強調したのだ。さらに、「教師はその個人的性格、一般的知識、特定の分野における熟達、社会の大問題への明確で適切な理解をもって、社会的向上を目指したあらゆる進歩的動きの中核となるべきであり、社会における真の教育者の最前線に位置していなければならないだろう」という、先の引用に続く箇所に典型的に見られるように、「社会」という言葉を連呼しながらプロテスタントたちの注意をそこへ向けようとしている。また、同じ記事の冒頭には、「真理とは常に真理を語ることにのみ存しているのではなく、[...] 行為そのものにも存している」⁴³⁾という言葉掲げている。信仰義認説が根幹にあるプロテスタンティズムにおいて、道徳や行為の強調は緊張感を伴うが、オスーナは敢えてそれをなしている。

この時期のオスーナの活動でさらに見逃すことができないものは、禁酒運動への没入である。米国ではプロテスタント教会が禁酒運動に大きな役割を果たし、1920年には全国禁酒法が制定されるまでに至った。メキシコのプロテスタンティズムもその影響を受け、各地に禁酒組織を形成したが、それらを統括する全国禁酒連盟が設立され、1923年、その事務局長にオスーナは就任した。オスーナの目的は禁酒の精神を公立学校に普及させることであり、合同出版社の禁酒本を公教育省を通して学校に頒布しようとした。また、オブレゴン政権の公教育大臣ホセ・バスコンセロスがオスーナに再び公教育省で働くことを勧めると、オスーナは禁酒教育の導入に携わる委員になることでこれを了承している。

オスーナが禁酒運動に身を入れた理由の一つは、メキシコの公的権力においても禁酒運動が認知され始めたからであろう。連邦区、ユカタン、ソノラなど、一時的であったにせよ禁酒法が制定された地域があったし、オ

ブレゴンやカイェスは禁酒に深い関心を示していた。このような当時のメキシコ革命の潮流にオスーナも乗ろうとしていたのである。また、禁酒運動自体は世俗的な目的の運動であるため、世俗性を装いながらプロテスタンティズムの諸価値を広めようというプロテスタントたちの戦略に合致した。そこで、オスーナは公立学校の教師が適切な禁酒教育を行えるよう『飲酒——初等学校教師及び中等学校学生のための禁酒教育の手引書』を著している。この書では飲酒の医学的分析だけでなく、その社会的影響についても扱われている。特に第24,25章は「飲酒と国民生活」と題され、オスーナが唱えてきた社会論、ナショナリズム論、教会論がふんだんに展開されている。「人間の生命は諸国民の経済的安寧、軍事力の基盤となる。よって、死亡率を高め、疾病を誘引、継続させるものは全て、いかなる国民の生命をも積極的に脅かすものである。すでに述べたように、飲酒は死亡率を高め、余命を縮めるのであるから、国全体の利益に直接反するものであることは容易に理解できよう」。「飲酒は国民のあらゆる活動に明らかに害を与える。ナショナリズムの精神、愛国心、権威への敬意や、高く優れた理想の形成とその理想に対する忠誠とは、飲酒によって深刻に損なわれている」⁴⁴⁾。これらの記述を読めば、オスーナがいかに飲酒問題を国民形成に結び付けて考えていたかがわらう。

さらに、国民統合の原理として「知性及び愛、奉仕、自己犠牲といった精神」を挙げ、「飲酒は国民生活や完成された社会組織の広範な発展に対するおよそ克服することのできない障害であり、人類の進歩を最も助ける近代的民主主義制度の展開をも妨げている」⁴⁵⁾としている。ここに記された「知性」、「愛」、「奉仕」、「民主主義」といった言葉は他のナショナリズムの論者も頻繁に使うものであり、これらの言葉が直接宗教と結びついているとは一見して識別することはできない。しかし、これらの一見世俗的な価値は、米国においてそうであったように、宗教（明言はしていないが、要するにプロテスタンティズム）の助けによって実現されるものであると付け加えることも忘れてはいない。「全ての教派の教会が信者の実践的道

徳に最大の重きを置くことが不可欠となっている。その作業の中には諸悪の撲滅も含まれるべきである。[...] 聖職者には禁酒運動を推進する大きな機会がある。なぜなら、彼らの下にいる信者に対して彼らは絶大な影響力を行使し、また、彼らは教養があり、社会的重要性を持つあらゆる問題を根底から探る能力があると考えられるからだ。[...] 米国ではキリスト教会が長年にわたって偉大な禁酒運動を支え、全精力を傾けて禁酒の実施と維持に最も貢献してきた。[...] だから、このような悪を断固として倒そうとする人道的で文明的な作業の推進のために、宗教組織の強力な助けを借りることは当然であろう」⁴⁶⁾。

恐らくメキシコ史上最も苛酷にカトリック教会を弾圧し、最もプロテスタントイズムを庇護したカイェス政権の発足は、オスーナにとっても歓迎すべきことであり、公教育省次官に就任していたモイセス・サエンスに頼み、同省に本格的に復職する決心をしている⁴⁷⁾。ここでメキシコ政府に深刻な問題が生じた。1925年の石油法と翌年勃発したクリステーロス戦争に起因する米国政府との摩擦である。このときカイェスはオスーナに工作を依頼しているが、オスーナはこれを引き受け、ナッシュヴィル、ワシントン、ニューヨークなどを回り、南北メソジスト教会、YMCA、北米キリスト教会連盟協議会（後の米国教会協議会）などの支援を受けて、米国政府や石油企業に圧力をかけている。プロテスタント教会という米国屈指の圧力団体に顔が利くメキシコのプロテスタント信者は、このような形でも革命で活躍しえたのである。

VI 戦略の時代の終焉

1927年、米国がカイェス政権を承認するのを見届けるようにオスーナはメキシコ市を去り、ヌエボレオン州知事アーロン・サエンスに招かれて同州公教育局長に就任した。ここでもオスーナは政争に倦み、1932年に辞してタマウリパス州に帰り、一族と農業に勤しんだ。そして、1943年、合同出版社から『学校のために、祖国のために』を出版するのである。

この書を通読して気付く点の一つは、すでに本論にも数箇所引用したが、政治への嫌悪感が頻繁に表明されていることである。政府高官に就任しても結局政治がいやになって辞めてしまったとの記述が多い。この書は政治活動から引退して後に書かれたものであり、政治への忌避が本当に公職を辞する際の大きな動機であったか疑問も残るが、少なくともオスーナは自分の半生を振り返りながら、政治に深く介入したことを悔いている。余生を故郷の農場で送ったのもその反動であろうか。その悔いは、彼が率先してプロテスタントたちに訴えた革命の理念やナショナリズムに関し、彼自身抱くようになった疑念から生じているようだ。

その証左を、ヌエボレオン州公教育局長在任中の1929年、ハバナで開催されたラテンアメリカのプロテスタント諸派による合同会議でオスーナが行った発表の報告書に見ることができる。この会議は大陸規模の超教派会議としては初めてラテンアメリカ人によって主催されたものであり、その強調点の一つはナショナリズムの積極的承認であった。オスーナはこの全体的流れに合わせてナショナリズムの重要性を説きながらも、それを相対化するような言も述べているのである。「このナショナリズムの大きな潮流にもかかわらず、世界は一体であり、我々は日々接近してきていることを否定できる者はいまい。[...] いかに関国個別の利害に注目が集められようとも、インターナショナリズムに背を向けることはできないのである。インターナショナリズムに関してプロテスタント学校はいかなる態度を取るべきだろうか。個人や集団の人間的生活に関するキリストの永遠の原理は、近代史のあらゆる段階におけると同じ効力を今日も持っている。人類が抱える問題は複雑化の一途をたどり、それを解決するための新たな手段も増え続けているが、そうなればなるほど、我々の生活の指針として、兄弟愛、隣人への奉仕、愛、個人と集団の純潔さといった最も健全で周知の原理を確立する必要性が高まっている。従来歴史以上に、近代社会はこれらの原理を必要としている。」⁴⁸⁾。

ここには、「人類が抱える問題の複雑化」において、「それを解決する新

たな手段」としてナショナリズムを効力あるものと認めながらも、すでにそれを全面的に信頼できないオスーナの姿が見られる。そのことは恐らく、メキシコのナショナリズムの方向性が次第に明確化し、プロテスタンティズムがそれに付いて行かれなくなったことが一因であろう。もともとプロテスタンティズムがメキシコのナショナリズムへ接近しえたのは、リベラリズムの「過去」、すなわち、独立、レフォルマ期、対仏戦争勝利や、その「英雄」であるイダルゴ、ファレスらとともに称賛できたからであった。これらの事件や人物がメキシコを圧政から解放し、民主主義の礎を築いたことが、先進文明国になろうという「普遍的」目標へ向けてメキシコを前進させたこととプロテスタンティズムは捉えたのである。ところが、革命の進展とともにメキシコでは、グアダルーペの聖母を戴くカトリック・ナショナリズムと、先住民や混血といった「人種的特殊性」をモチーフとした世俗的官製ナショナリズムの二大潮流対立の様相が明らかとなる。プロテスタンティズムにとっては聖母崇拜はもとより、あまりに「特殊メキシコの」な先住民論、混血論に擦り寄ることも容易ではなかった⁴⁹⁾。プロテスタンティズムが求めたものは、神に選ばれた先進国の証しとしての民主主義国家であり、それは全人類が目指すべき「普遍的」目標であった。米国ではこれがナショナリズムのモチーフとなりえたが、メキシコの官製ナショナリズムにとって、民主主義は究極的目標というより、国民形成の一要素、一手段でしかなかった。メキシコ革命は国民形成の技術的手段の提供をプロテスタンティズムに求めたが、メキシコ国民を投影するイメージの精製にまで「特殊米国的」なプロテスタンティズムの介入を求めていなかった。このように、革命との国民観の相違が浮き彫りとなったことを契機に、オスーナはナショナリズムという戦略の台頭で脇に置かれがちであったプロテスタンティズムの「原理」に立ち返り、これからナショナリズムへ向かおうとはやる他国のプロテスタントたちに警鐘を鳴らそうとしたのではないか。その「原理」とは、教育の普及によって祖国を先進文明国の一員とし、人類の進歩を先導させるという普遍主義的な「インターナ

シヨナリズム」, 及び「愛」, 「隣人への奉仕」, 「純潔」といったキリストの教えであった。

他のラテンアメリカ諸国と比して, メキシコでは大革命の勃発によってプロテスタント・ナシヨナリズムの興隆が早まり, ハバナ会議が開催された1929年にはその限界が見え始めていた。同年末『キリスト教世界』は休刊となり, 各教派は個別の道を歩み始め, 最大のパトロンであったカイエスはすでに退陣し, 1930年代初頭には公教育省で社会主義勢力が台頭し, 次官サエンスの罷免は時間の問題となっていた。それまでプロテスタント・ナシヨナリズムを強力に推進してきたオスーナが, 自らナシヨナリズムに疑問を投げかけ, キリスト教の「原理」に帰ろうとしたことは, 「学校のために, 祖国のために」活動してきたプロテスタントたちの戦略の時代の終焉を如実に物語っているようだ。

注

定期刊行物略号

AIM *Actas de la Conferencia Anual de la Iglesia Metodista Episcopal en México.*

BE *Boletín de Educación.*

BSEP *Boletín de la Secretaría de Educación Pública.*

EAC *El Abogado Cristiano.*

EMC *El Mundo Cristiano.*

EU *El Universal.*

- 1) Jean Pierre Bastian, *Los disidentes: sociedades protestantes y revolución en México, 1872-1911*, México, Fondo de Cultura Económica/El Colegio de México, 1989, Deborah J. Baldwin, *Protestants and the Mexican Revolution: Missionaries, Ministers, and Social Change*, Urbana/Chicago, University of Illinois Press, 1990.
- 2) Bastian, *op. cit.*, pp. 19-20.
- 3) *Ibid.*, pp. 20-21.
- 4) Baldwin, *Variation Within the Vanguard, Protestants and the Mexican Revolution*, Ph. D. Thesis, The University of Chicago, 1979.
- 5) Bastian, *op. cit.*, pp. 16-17.

- 6) 会衆派、プレスビテリアン、メソジスト、バプテストといった米国の有力プロテスタント諸派がメキシコでの宣教活動を正式に開始したのは、米国では南北戦争の終結により社会的安定を取り戻し、メキシコではレルド・デ・テハーダ政権（1872—76年）が近代化、反カトリック政策を強力に推進した1870年代のことである。
- 7) *Ibid.*, pp. 16, 19.
- 8) たとえば、Ramón Puente, *Pascual Orozco y la revuelta de Chihuahua*, México, Eusebio Gómez de la Puente, 1912, Juan Gualberto Amaya, *Madero y los auténticos revolucionarios de 1910: hasta la decena trágica y fin del general Pascual Orozco*, México, 1964, Michael C. Meyer, *El rebelde del norte: Pascual Orozco y la Revolución*, México, UNAM, 1984 を参照。
- 9) Baldwin, *Protestants and the Mexican Revolution*, pp. 4, 76.
- 10) 拙論「メキシコにおける市民宗教の創造とプロテスタンティズム——革命家モイセス・サエンスの思想と実験」『宗教研究』310号, 1996年。サエンスについては主に教育史と人類学史における位置づけが行われてきたが、彼のプロフィールの一つとしてその信仰に言及する研究もある。Gonzalo Aguirre Beltrán, *Antología de Moisés Sáenz*, México, Ediciones Oasis, 1970, X, Raúl Mejía Zúñiga, *Moisés Sáenz: educador de México*, México, Federación Editorial Mexicana, 1976 (1ª ed. 1962), pp. 21–23 を参照。また、サエンスに関して最近出された邦語論文、青木利夫「メキシコにおけるナショナリズムと〈インディオ〉」(中内敏夫ほか編『人間形成の全体史』大月書店, 1998年)は、サエンスがプロテスタントであったことに全く黙している。この論文では、先住民を生物学的対象として捉えてきたディアス期以降の視線に対し、国民統合を推進するサエンスが文化的存在として「現在に生きる」先住民を認識したことが説かれている。だが、彼のそのような認識形成には、布教対象である先住民をある意味で文化的存在と捉えてきたカトリック教会に対し、彼がクリステロス戦争期の公教育省高官として対処を迫られていたことや、先住民問題を階級問題化する社会主義勢力への警戒、米国で学んだデューイ思想の応用、米国プロテスタント系組織である夏期言語研究所招致の下準備など、ナショナリズムの文脈のみでは説明できない彼の信仰と連動した様々な思惑が働いている。この論文はこれらの具体的事情を何ら考量せず、サエンスの思想を扱うと言いつつながら宗教者としての思想的背景を切り捨て、独裁や帝国主義に抗する教科書的ナショナリスト教育家の定式に彼を押し込んでしまうが、都合よく問題を単純化しすぎだ。また、国民統合の技法としての先住民の実体化を問いつつながら、「セクト」を排して描かれるメキシコ国民史の実体化にはなぜかとも鈍感なのか。宗教問題を避けようとするのは日本的「国民性」ゆえなのかかもしれないが、サエンスに関してのより綿密な掘下げを前

提に書かれるべき論文ではなかったか。

- 11) 拙論「メキシコ革命とプロテスタント・ナショナリズム——超教派雑誌『キリスト教世界』を通して」『宗教研究』318号,1998年。
- 12) メキシコ大学院大学から出された『メキシコ革命史』(全23巻)にはオスーナへの言及が数箇所見られるが、6巻ではOzunaと綴りを誤り(正しくはOsuna)、7巻ではファーストネームをRafaelとするなど(ちなみにラファエル・オスーナはウィンブルドンでの優勝歴もあるメキシコの有名なテニスプレーヤー)、初歩的な誤記が目立つ。革命史におけるオスーナの扱いの低さを象徴しているようだ。Berta Ulloa, *Historia de la Revolución Mexicana*, 6, México, El Colegio de México, 1988 (1^a ed. 1983), p. 562, Álvaro Matute, *Historia de la Revolución Mexicana*, 7, México, El Colegio de México, 1995, p. 306を参照。
- 13) Félix Neira Barragón, *Andrés Osuna*, Saltillo, Escuela Normal de Coahuila, 1969.オスーナがプロテスタントであったことに言及はない。
- 14) Andrés Osuna, *Por la escuela y por la patria*, México, Casa Unida de Publicaciones, 1943, pp. 13-20を参照。
- 15) *Ibid.*, p. 23.
- 16) 自伝によればオスーナはサルティーヨでフリーメイソンや相互扶助組織にも加入している(*Ibid.*, pp. 75-76)が、バステイアンは急進リベラリズムや反カトリシズムを介してこれらの集団間の境界線が不明瞭になったと説明している。Bastian, *op. cit.*, pp. 137-138を参照。
- 17) Osuna, *op. cit.*, p. 28.
- 18) オスーナはこのときの2年間の米国滞在を利用して数学や化学も学んだが、その成果として1899年に『基礎化学概論』を出版した。筆者が目を通したのは1916年の重刷版(Osuna, *Bosquejo de química elemental*, París/México, Librería de la Vda. de Ch. Bouret, 1916)。
- 19) Osuna, *Por la escuela y por la patria*, p. 33.
- 20) *Ibid.*, pp. 36-37.
- 21) Osuna, “La preparación de las clases”, *EAC*, 11 de junio de 1903, p. 190を参照。
- 22) Osuna, “Cursos graduados para la escuela dominical”, *EAC*, 25 de agosto de 1910, p. 531.オスーナは自ら翻訳した『日曜学校のための段階別授業シリーズ』(注29参照)を携えて、1912年にメキシコ市の教会で講演を行っているが、それがメキシコのプロテスタント教会にとって新しいものであったことを『キリスト教弁護士』は伝えている。“Las conferencias del Prof. Osuna”, *EAC*, 25 de julio de 1912, p. 466を参照。
- 23) バステイアンはオスーナをはじめ数人のプロテスタント信者がカルデナス

- 体制にクライアントとして加わっていたことを指摘している。Bastian, *op. cit.*, p. 249 を参照。
- 24) Osuna, *Por la escuela y por la patria*, p. 99.
- 25) *Ibid.*, p. 100.
- 26) *Ibid.*, p. 101.
- 27) *Ibid.*, p. 102.
- 28) この点については、James C. Hefley, *Aarón Sáenz: Mexico's Revolutionary Capitalist*, Waco/London, Word Books, 1970, pp. 53-56, 68-71 を参照。アロンはオブレゴン政権の外務大臣などを歴任した。
- 29) Neira Barragón, *op. cit.*, p. 43. オスーナには以下の訳書があるが、いずれも筆者は未見。Banks, *Manual de doctrina cristiana* (『キリスト教教義便覧』), Borden P. Bowne, *Teoría del pensamiento y del conocimiento* (『思想・知識論』), Mateo Lelievre, *Biografía del reformador evangélico Juan Wesley* (『プロテスタント改革者ジョン・ウエスレー伝』), J. H. Muirhead, *Elementos de ética* (『倫理学入門』), *Series de lecciones graduadas para las escuelas dominicales* (『日曜学校のための段階別授業シリーズ』)。
- 30) Osuna, *Elementos de psicología pedagógica*, Nashville, Smith y Limar, 1910.
- 31) Osuna, *Por la escuela y por la patria*, p. 124.
- 32) Edward Bradford Titchener, *Elementos de psicología*, trad. por Ezequiel A. Chávez, 1904.
- 33) オスーナはカランサの要請を受けて急遽帰国したため、結局博士号取得のための最終試験を受けることができなかった。その後、キリスト教奉仕者としての活動が認められて、1926年にテネシー州チャタヌーガ大学から名誉法学博士号が贈られている。
- 34) “El nuevo Director General de Educación Pública”, *BE*, febrero de 1916, pp. 13-15 を参照。自伝によれば、公教育局長となったオスーナはコアウイラ州時代に米国から導入した視学官制度 *inspección* を国の制度として体系的に確立しようと努め、この制度は後の教育行政へと継承されていった。Osuna, *Por la escuela y por la patria*, pp. 42-43, 66-68, 135, 140-144, 311 を参照。この他にも、先の心理学や後述する禁酒運動、あるいはモイセス・サエンスが紹介した社会人類学やデューイ教育学など、メキシコに新しい学問、文化、概念が伝わる際、その伝達者としてプロテスタントが果たした部分はそれなりに大きかったのではないか。だが、それが全くと言っていいほど解明されていないのが現状である。今後プロテスタントがいかに関わっていたかという視点から、それらがメキシコに伝わる経緯を明らかにしていく作業が必要であろう。
- 35) Epigmenio Velasco, “Notable conferencia del Sr. Prof. Andrés Osuna en el

- Templo de Gante”, *EAC*, 13 de julio de 1916, pp. 439-440.
- 36) Ulloa, *op. cit.*, p. 472.
- 37) “Una asechanza en el Senado”, *EU*, 1^o de marzo de 1921, p. 3.
- 38) Osuna, *Por la escuela y por la patria*, p. 152.
- 39) *Ibid.*, p. 229.
- 40) 「信徒会代表」としては Osuna y Antonio Gutiérrez, “Conferencia de laicos”, *AIM*, 1921, p.99, Velasco y Osuna, “Informe de los delegados a la conferencia general”, *AIM*, 1925, pp. 92-94, 「合同出版社社主」としては Osuna, “Informe de la Casa Unida de Publicaciones”, *AIM*, 1924, pp. 125-128, Osuna, “Informe de la Casa Unida de Publicaciones, S. A.”, *AIM*, 1926, pp. 119-121 などの記事がある。
- 41) Osuna, “El maestro”, *EMC*, 26 de mayo de 1921, p. 487.
- 42) Osuna, “La obra educativa”, *EMC*, 30 de junio de 1921, p. 610.
- 43) Osuna, “El maestro”, *EMC*, 7 de julio de 1921, p. 3.
- 44) Osuna, *El alcoholismo: manual de enseñanza antialcohólica para uso de profesores de educación primaria y estudiantes de escuelas secundarias*, México, Franco Americana, 1929, p. 234.
- 45) *Ibid.*, p. 220.
- 46) *Ibid.*, pp. 249-250.
- 47) 復職後のオスーナは『公教育省報』に二点の記事を書いているが、いずれもカイェス政権の方針に合致した反カトリシズムを内容としている。Osuna, “Plática por radio sobre México. Diciembre 3 de 1926”, *BSEP*, enero de 1927, Osuna, “Obra educativa del clero católico romano en México”, *BSEP*, febrero de 1927 を参照。
- 48) Osuna, *La escuela evangélica*, La Habana, Herald Cristiano, 1929, pp. 8-9.
- 49) 『キリスト教世界』には先住民を話題とした記事は少なく、プロテスタンティズムの大きな関心がそこになかったことを窺わせる。この関心が膨らむのはモイセス・サエンスの市民宗教論と夏期言語研究所の活動開始以降のことであり、それを契機にインディヘニスモは、ナショナリズムに行き詰まったプロテスタンティズムの新たな戦略となっていく。